

問題・解答
用紙番号

33

の解答用紙に解答しなさい。

国

語

〈受験学部・学科〉

法学部、外国語学部、経済学部、経営学部、
理工学部(住環境デザイン学科・建築学科・都市環境工学科)、
農学部【文系科目型】(食農ビジネス学科)

問題は一〇〇点満点で作成しています。

I

次の1～5の傍線部のカタカナをそれぞれ漢字に直しなさい。(一〇点)

- 1 王のシヨウゾウを描く。
- 2 大げさなシヨサをする。
- 3 メンミツな打ち合わせを行う。
- 4 肉体をコクシする。
- 5 取引の背後でアンヤクする。

Ⅱ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、解答に句読点等の記号がある場合は、それも字数に含むものとする。(四五点)

新型コロナウイルス感染症が中国・武漢市で発生した。流行の拡大が続いている。二〇二〇年二月二十六日現在、八万一一〇九人の感染者と二七六二人の死亡者がWHO（世界保健機関）から報告されている。流行は世界各地に広がり、パンデミックの様相を呈している。パンデミックとは元来、汎流行を意味する言葉で、広大な地域あるいは世界全体での流行の広がりを指す。

流行がパンデミックへと至る道は、大きく三段階に分かれる。第一段階は、ある病原体が動物で確認されているが、ヒトでの感染は確認されていない前流行期。第二段階は、ヒトで感染が確認されるが、感染流行は比較的小規模に限定される限定的流行期。そして第三段階が、一般社会にまで感染が広がり、世界全体で急速に流行が始まるパンデミック期である。前流行期あるいは限定的流行期において、病原体の封じ込めに成功し、流行が予防できれば、感染はパンデミックへ至ることなく終息する。できなければ、流行はパンデミックへと至る。

I 歴史を振り返れば、私たちは、幾度ものパンデミックを経験してきた。十四世紀ヨーロッパで流行した黒死病（ペスト）やコロナウイルスによる再発見後の十六世紀新大陸でみられた旧大陸感染症の大流行。一九一八年から一九九年にかけて世界を席卷したスペイン風邪^aなどである。

黒死病によって、当時のヨーロッパ世界は、人口の四分の一とも三分の一とも推定される人を失った。黒死病とは、ペスト菌がもたらす肺炎により、全身に黒いあざが出ることから名付けられた。コロナウイルスの再発見以降の十六世紀南北アメリカ大陸は、麻疹や天然痘、結核といった感染症によって人口の八割以上を失った。それがスペインの植民地進出を許す要因ともなった。一九一八年のスペイン風邪は、五〇〇〇万人とも一億人とも推計される死者を出した。一九一八年当時の世界人口が一億人ほどだったことから考えれば、パンデミックがもたらす被害の大きさがわかる。

パンデミックは定義からすれば、汎世界的な流行を起こした感染症を指す。その意味では、現在、人間社会で流行している感染症の多くは、ある時点でパンデミックへと至る道をたどった感染症ということになる。ハンセン病や結核、梅毒、そしてエイズなどである。

ただし、パンデミックに至った時間単位は、スペイン風邪とエイズやハンセン病、結核では大きく異なる。スペイン風邪が汎世界的に流行するのに必要だった時間は、商業航空機がなかった一九一八年当時に、わずかに六ヶ月から一年ほどだった。一方、一九二一年前後に、現在のコンゴ民主共和国と中央アフリカ共和国の国境周辺で、一人の人間がチンパンジーから感染して始まったエイズは、一九八〇年代初頭にアメリカではじめて報告されるまで、約六〇年の歳月を要した。ハンセン病や結核については、推測の域を出ないが、数百年あるいは数千年をかけて、大陸を越えて広がり、パンデミックとなったと思われる。

新型コロナウイルス感染症でいえば、最初の患者発生が二〇一九年十二月頃だったことからすれば、パンデミックに至るまでに要した時間は、わずかに一、二カ月であったということになる。何がその違いをもたらしたのか。

病原体の性質がそうした流行の様相を規定することは間違いない。飛沫によって感染するインフルエンザや新型コロナウイルス感染症が、より濃厚な接触が必要な結核やエイズより早い速度で流行し、パンデミックに至ることは直感的に理解できる。一方で、病原体が同じであっても、流行の速度や規模は、その時々「社会のあり方」によって異なる。思考実験の域を出ないが、今から一〇〇年前、あるいは五〇〇年前、一万年前の世界に新型インフルエンザや新型コロナウイルス感染症が野生動物からヒトへと感染し、流行を始めたとすればどうだろう。流行の様相は現在とは大きく異なったものであったに違いない。

一〇〇年前といえば、十一世紀初頭の世界であり、日本では藤原北家による摂関政治が行われた平安時代の中期にあたり、中国では北宋が栄えた。西ヨーロッパでは、ノルマンディーがイングランドを征服した時期にあたる。世界人口は二億人を超え三億人に迫るところだった。一方、五〇〇年前はといえば、中東の肥沃な三日月地帯に古代メソポタミア文明が栄えた時代となる。世界人口は、五〇〇万人程度であった。さらに一万年前といえば、人類が一部で農耕や牧畜を始めるが、大半の人は狩猟採集生活を送っていた。人々は、数家族の血縁関係を中心にしたバンドと呼ばれる集団で生活し、日常的には集団外の人々と接触することはなかった。そんななかで新型インフルエンザや新型コロナウイルス感染症が流行を始めたとして、流行は小集団を席卷するが、そこから外へと広がることはなく、やがて新規感受性を失った病原体は流行の袋小路に迷い込み、集団から、そして最終的には、世界から消えていくことになったに違いない。それが感染症流行の自然史であった。数理モデルを用いた計算からは、そうした感染症が社会に定着するには、数十万人規模の都市人口が必要となることが明らかになっている。そうした都市人口を人類がはじめて持つに至ったのは、たかだか数千年前のことに過ぎない。その意味では、インフルエンザや麻疹、あるいは天然痘といった急性感染症は、五〇〇万年にも及ぶ人類の歴史において、極めて新しい病気といえる。

二十世紀、汎世界的流行をしたエイズやスペイン風邪を例に、社会のあり方が、いかに感染症を
選択し、パンデミックを性格付けるかを見ていこう。

エイズウイルスがヒトに感染したことは、それまでにもあったに違いない。しかし、ウイルスはヒト社会に定着することなく、かすかな痕跡を残して消えた。そうした機会は一度や二度ではなかった。それが一九二〇年代初頭の社会状況のなかで足場の確保に成功する。それが可能になったのは、今から考えても偶然に過ぎなかった。しかし偶然の確率を高め、その後の感染流行を確かなものにしたのは、まさに当時の社会のあり方だった。欧米による植民地経営と近代医学の植民地への導入がその道を拓いた。

欧米の植民地経営は、鉄道や港湾の建設を通して、都市に男性労働者を集積し、そこで暮らす人々の男女比を極端に歪いびつなものとした（一九一〇年のレオポルドヴィル〔現・キンシャサ〕における成年の男女比は一〇対一であった）。それが都市における売春と性産業の隆盛をもたらしした。

一方、近代医学の導入は、当時アフリカで風土病的に流行していた眠り病やイチゴ腫、梅毒の治療を可能にした。治療薬には砒ひ素系化合物が用いられ、大規模な注射が大陸全体で繰り返された。皮下注射か静脈注射が主たる投与方法だった。薬物の投与は、効果を確実にするために、数回にわたって行われた。当然のように、注射器と針は使い回された。残る資料によれば、一九一七年から一九九年にかけて、ザイール（現・コンゴ民主共和国）で熱帯病対策に従事した診療班は、困難な状況下で、一八カ月にわたる医療プロジェクトを実施したとある。診療班はその間に、八万九七四三人を診察し、五三四七人の患者を発見し治療した。装備は三台の顕微鏡と六本の注射器しかなかった。しかし介入は効果的で、新規感染率は減少した。計画はザイールの全国規模で実施に移され、数百万回の皮下注射あるいは静脈注射が行われている。こうした状況が、たった一人のエイズ患者からのウイルス拡散を可能にした。ウイルスは、性産業と、熱帯病対策の一環としての感染症治療を格好の土壌として拡大した。結果、二十世紀後半以降、エイズは汎世界的に流行し、六〇〇〇万人を超える感染者と三〇〇〇万人近い死亡者を出す。

最初の感染がそれ以前の社会で起こっていたとすれば、どうだったろう。例えば、植民以前のフリカ社会であれば……。歪な性比がもたらす売春はなく、注射器や針の使用も稀か、あるいはなかった。ウイルスが偶然、チンパンジーからヒトに感染したとしても、それは流行の袋小路に入り込み、やがて社会から消えて行っただけである。狩猟採集社会におけるインフルエンザや麻疹のように。そうしたことは、過去に何回も起こったに違いない。

一九一八年に流行したスペイン風邪も例外ではない。最初の流行が始まったのはアメリカ東海岸だった。東部の公衆衛生担当者は、次のような言葉を残している。

「まず木工職人と家具職人をかき集め、棺ひつぎ作りを始めさせておくこと。次に、街にたむろする労働者をかき集めて墓穴を掘らせておくこと。そうしておけば、少なくとも埋葬が間に合わず死体がどんどんたまっていくという事態は避けられるはずだ」

一九一八年といえ、第一次世界大戦末期で、アメリカがヨーロッパ戦線への参戦を決めた年だった。若い兵士たちは船で大西洋を渡り、西部戦線へと向かった。船は混み合い、前線では兵舎や塹壕ざんごうで、多くの兵士が密集した。それがウイルスの拡大に格好の土壌を提供した。一方、世界的に見れば、第一次世界大戦は、人や物資を、植民地も巻き込んで動員して戦った、初めての世界的大戦であった。増大する物流や、動員を含めたヒトの移動が、それまでにない速さで流行を広めた。速い流行速度が病原性を高め、高い致死率をもたらした可能性は否定できないと、個人的には考えている。もし、スペイン風邪の流行が、世界大戦中でない時に起こっていたとすれば、どうなっ

いただろう。流行はやがてパンデミックに至ったとしても、それに至る時間はもう少し長く、感染は穏やかだった可能性は高い。

なぜ、ある感染症が流行するのか。これまで私たち研究者は、その原因を一生懸命に考えてきた。しかし、どうやらその考え方は「逆」ではないかと、私は近年思い始めている。流行する病原体を選び、パンデミックを性格付けるのは「ヒト社会」あるいは大きく「ヒト社会のあり方」ではないかと。古くは、中世ヨーロッパの十字軍や民族移動によってもたらされたハンセン病。十八世紀産業革命が引き起こした環境悪化が広げた結核。世界大戦という状況下で流行したスペイン風邪や、植民地主義と近代医学の導入がもたらしたエイズについては述べた。その意味では、今回の新型コロナウイルス感染症や未だアフリカを中心に流行収束が見られないエボラ出血熱も例外でない。人の行き来により格段に狭くなった世界。野生動物が暮らす生態系への、私たち人間のとめない進出。温暖化による野生動物の生息域の縮小。そうしたことが新たな感染症の流行と拡大をもたらした。

その上で、パンデミックによる影響を考えれば、次のようなことが言えるのかもしれない。

Ⅲ 十四世紀にヨーロッパで流行したペストは、最終的にヨーロッパ全土を覆った。この時に、ペスト流行を免れた人はいなかったという。否、一時的に流行を免れたとしても、やがて流行は、次の機会にその集団を襲った。居住地や宗教や生活様式に関係なくヨーロッパを舐め尽した。まさにパンデミックであった。その結果、ペストの流行はその後のヨーロッパ社会を根底から変えた。

ペストがヨーロッパ社会に与えた影響は、少なくとも三つあった。第一に、労働力の急激な減少が賃金の上昇をもたらした。農民は流動的になり、農奴やそれに依存した荘園制の崩壊が加速した。第二に、ペストの脅威を防ぐことのできなかった教会はその権威を失い、一方で国家というものが人々の意識のなかに台頭してきた。第三に、人材の払底が、既存の制度のなかであれば登用されることのなかった人材の登用をもたらし、社会や思想の枠組みを変える原動力になった。結果として、封建的身分制度は実質的に解体へと向かう。同時にそれは、新しい価値観の創造へと繋がっていった。半世紀にわたるペスト流行の後、ヨーロッパは、ある意味で静謐で平和な時間を迎えた。それが内面的な思索を深めさせたという歴史家もいる。気候の温暖化も寄与した。そうした条件が整うなかでやがて、ヨーロッパはイタリアを中心にルネサンスの最盛期を迎え、文化的復興を遂げる。ペスト以前と以降を比較すれば、ヨーロッパ社会はまったく異なった社会へと変貌し、変貌した社会は、強力な主権国家を形成する。中世は終焉を迎え、近世を迎えたヨーロッパは、やがて新大陸やアフリカへと踏み出していくことになる。これがペスト後のヨーロッパ世界であった。

疾病構造も変化した。ペスト流行以前のヨーロッパにおいて、ハンセン病は一貫して重要な病気であった。ハンセン病療養所（レプロサリウム）が各地に建設された。十三世紀頃、ヨーロッパには二万近い数のレプロサリウムが存在した。にもかかわらず、十四世紀に入ると、ヨーロッパで新

たなレプロサリウムが建設されることはなくなった。致死率の高いペストのため、多くの患者が亡くなったことは確かであろう。しかしそのために、ハンセン病患者の発生数が急激に減少したとは考え難い。しかし事実とはいえば、この時期のペスト流行以降、ハンセン病患者数がそれ以前の水準に達することはなかった。理由は未だにわからない。

一方、^{IV}コロンブス以降の十六世紀南北アメリカでも感染症は社会を大きく変えた。天然痘や麻疹といった、新大陸にはなく、旧大陸にのみ存在した感染症の広範かつ急激な流行の後に出現した社会は、それまで現地の人々が暮らしてきた社会とは異なる、スペインを中心とする別世界となった。歴史学者のウィリアム・マクニールは以下のように述べている。

「疫病が神の怒りだとする解釈は、当時多くの人が信じていた『病』に対する解釈である。それに関して言えば、スペイン人も新大陸住民も同様であった。その神の怒りが、新大陸住民に無慈悲な鉄槌てつゐを振り下ろしたにもかかわらず、スペイン人には振り下ろされなかった。征服者であるスペイン人たちが一方的に神の恩寵を受けているという事実には、住民は慄おのいた。スペインの征服者が、どれほど人数が少なく、どれほど残忍かつ卑劣であったとしても、住民たちにそれに抗う力は残されていなかった。

聖なる理法も自然の秩序も、はつきりと原住民の伝統と信仰を非としている以上、抵抗ということにどんな根拠が残っていたと言うのか。スペインの征服事業が異常なほどの容易さだったこと、また、わずか数百人の男が広大な地域と数百万人の人間をがっちり支配し得た事実、このように考えてきて初めて理解できる」

パンデミック後に時として出現する新たな社会は、独立した事象として現れるわけではなく、歴史の流れのなかで起こる変化を加速するかたちで表出する。十四世紀のペスト流行時も、十六世紀南北アメリカでの感染症流行時もそうだった。さらにいえば、一九一八年のスペイン風邪流行時もある。流行後の世界の変化は、新興国アメリカの世界史の舞台における台頭だった。アメリカはその後、世界の政治や経済の中心となっている。

新型コロナウイルス感染症の流行が今後どのような軌跡をたどることになるのか、現時点で、正確に予測することはできない。ただ流行が拡大し遷延すれば、あるいは新型コロナウイルス感染症とは異なるが致死率の高い感染症（新型インフルエンザなど）が今後、世界的に流行すれば、それは、私たちの知る世界とは異なる、新たな世界出現の契機となるかもしれない。それがどのような社会かは、もちろん誰にもわからない。もしかしたら、十四世紀ヨーロッパのペスト流行時のように、旧秩序（アンシャンレジーム）に変革を迫るものになる可能性さえあるだろう。しかもそうした変化は、流行が終息した後でさえ続く。あれが世界秩序の転換点だったということになったとしても不思議はない。

繰り返しになるが、感染症は社会のあり方がその様相を規定する。そして、流行した感染症は、

時に社会変革の先駆けとなる。そうした意味で、感染症のパンデミックはきわめて社会的な現象であり、その時代、時代を反映したものとなる。

歴史が示す一つの教訓かもしれない。

(山本太郎 「感染症と文明社会」『中央公論』第134巻第4号)

問一 波線部 a・b の本文中の意味として最も適切なものを、次のア～エのうちからそれぞれ選びなさい。

a 席卷する

b 思考実験

ア 多くの人に恐怖を与える

ア 理論的にのみ可能な実験

イ 支配下に収める

イ 頭の中で組み立てられた実験

ウ 勢力範囲を急速に拡大する

ウ 未知の状況を想定した実験

エ 大混乱に陥れる

エ 条件や状況を理想化した実験

問二 傍線部 I 「歴史を振り返れば、私たちは、幾度ものパンデミックを経験してきた」とあるが、パンデミックについて述べた次のア～エのうちから、適切でないものを一つ選びなさい。

ア パンデミックは、その当時の社会に大きな被害をもたらしたが、病原体が同じであっても、流行の速度や規模は、その時々「社会のあり方」によって異なると考えられる。

イ 十六世紀南北アメリカ大陸でパンデミックを引き起こした病原体は、旧大陸から持ち込まれたものであった。

ウ ハンセン病や結核、梅毒、エイズは、限定的流行期を経て、最終的にパンデミックへと至った感染症である。

エ 最初の患者発生からパンデミックに至るまでに要した時間は、この患者発生が現代に近づけば近づくほど短期間となる。

オ インフルエンザや麻疹、あるいは天然痘といった急性感染症がパンデミックを引き起こすようになったのは、人類の歴史のなかでは最近のことである。

問三 傍線部 II 「社会のあり方が、いかに感染症を選択し、パンデミックを性格付けるか」とあるが、エイズがパンデミックとなる土壌となった、一九二〇年代のアフリカ社会の二つの事情を、それぞれ四十字以内で説明しなさい。

問四 傍線部Ⅲ「十四世紀にヨーロッパで流行したペスト」が、その後のヨーロッパ社会に与えた影響について述べた次のア～オのうちから、適切でないものを一つ選びなさい。

ア 十四世紀のペスト流行は、地域や宗教や生活様式の違いを超えて、ヨーロッパ全体を覆い尽くした。

イ 労働力の不足が農奴の固定化を困難にしたために、農奴制や荘園制は、やがて崩壊していった。

ウ 必要な人材が確保できなかったために、身分を超えて人材を登用することとなり、封建的な身分制が揺らぐようになった。

エ ペスト流行の後、ヨーロッパは教会の権威が揺らぎ、国家が台頭することで、混乱と無秩序が支配した。

オ 社会や思想の枠組みを変える新しい人材が登用され、イタリアを中心にルネサンスが興った。

問五 傍線部Ⅳ「コロナルス以降の十六世紀南北アメリカでも感染症は社会を大きく変えた」とあるが、新大陸の社会が少数のスペイン人によって征服、支配された理由を述べた次の文の空欄に、本文中から最も適切な箇所を三十五字以内で抜き出し、初めの五文字を答えなさい。

新大陸の住民にとっては、天然痘や麻疹などの感染症が広範かつ急激に流行したことは、
[] ことを表すものとして、捉えられるものだったから。

問六 次のア～オについて、本文の内容に合致するものにはa、合致しないものにはbを、それぞれマークしなさい。

ア パンデミックに至るまでの時間の長短を左右する第一の要因は、病原体そのものの感染力である。

イ 感染症が何度も流行を繰り返すのは、数十万規模の人口の都市が作られるようになったためである。

ウ パンデミックを引き起こすような感染症も、人類の歴史において限定的な流行で終息したことが何度もあったと考えられる。

エ 一九一八年に流行したスペイン風邪がパンデミックとなったことと、アメリカが第一次世界大戦に参戦したことは関係はない。

オ パンデミックは新しい社会の出現を加速するが、それだけで社会のあり方を変えてしまうということはない。

Ⅲ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、解答に句読点等の記号がある場合は、それも字数に含むものとする。(四五点)

「言語それ自体」を保護するとはどのようなことなのだろうか。話者やその権利、そのことが話されてきた生活からも切り離されたモノとしての「言語それ自体」は、とりあえず、記述し、記録し、保存しておけばよい。一度、一定の基準にそって規格化されてしまえば、言語は時代を超えて保存することが可能になる。そのようにして書かれた言語はもう「死ぬ」ことはない。その記録を保存する博物館や情報センターをつくっておけばいいのであるならば、行政側としても、それほどコストはかからない。実際、そのような言語センターや研究所は各地で設立されている。言語学者としての仕事も、十全なかたちで言語学的手法にそって記述し、記録し、分析し、そのデータを保存すれば、それで終わる。実際に日本言語学会の「危機言語」小委員会は、「一六年あまりの活動を経て、発足当初の目的をはたした」として、二〇一〇年三月に解散している。

しかし、文化遺産としての言語を「保護」¹することは、その記録を「保存」することとは異なる。記述、記録が完了したから、もうこの言語は消滅しません、問題は解決しました、というのであれば、ここまで危機が叫ばれることもないだろう。「遺産」として、次世代にどのようにひきつぐのか、という問いが当然たてられ、言語という遺産を守り、次世代にひきつぐ、とは、その言語を使いつづけることにほかならない、という答えが導きだされる。一度、人びとの日常的なことは用のあり方が、「(危機に瀕した)言語」という「国際的な基準」によって専門的に記述しなおされたことによって、今度は人びと自身がその「言語」という概念を使用して、日々の経験を再記述するようになる。「生きた言語」とは使用されている言語である。言語とはアイデンティティの源泉であって、その存在は尊重されなくてはならない。わたしたちには、この危機に瀕した言語を使う権利と、この「文化遺産」としての言語を次世代に残す責務がある――。

その際に問題になるのは、やはりそれぞれの言語の「言語学的」な記述ではなく、「社会言語学的」な言語状況である。先の「危機度」の指標を逆行させ、小言語から大言語への「言語シフトを逆行させる」ための、具体的な政策や活動、専門家の協力が求められる。ユネスコの無形文化遺産セクション、危機言語についての専門家グループが二〇〇三年に刊行した報告書『言語の生命力と危機』では、その序文において、「言語的多様性は人類の遺産にとって不可欠である」と宣言したのち、多くの言語が危機的状况にあることを述べて、「この危機に対抗するためには、言語コミュニティ、言語の専門家、NGOと政府の協力的な努力が必須である」としている。

言語学者は、中立的な外部者としてある言語を記述したらそこから立ち去る、といった態度ではなく、よりその言語の状況にコミットした態度が求められる。たとえば、「日本言語学会 危機言語のページ」²においては、「Q5 言語の消滅を防ぐにはどうしたらよいですか? 危機言語に対

し、何かできることはありますか？」という問いに対して、まず、「言語学者としてできる最大の仕事は、もちろん危機言語の分析・記述・記録を行うことです」としたうえで、「ここからさらに一歩を進めて、言語学者みずからが危機言語の復興保持の方向に踏み出す道も開けています。つまり、現地コミュニティの要請に応え、危機言語を守るよう共に努力するということです」と答えているのは興味深い。言語学者は、一定の「活動家」としての役割を担うことが可能であり、期待されているということである。

その方法として、「たとえば教材作りや言語教育といった言語学関連の仕事」があげられている。一度、記述・記録され、保存され、名づけられた言語は、その記述されたテキストにもとづいて教材を作成し、教育をおこなうことで習得することが可能になる。消滅の危機に瀕した言語の場合、とくにそのような言語教育をおこない、言語を習得し、使用する場面をつくりださなければ、その言語を次世代にひきつがせることが困難であるため、世界各地で言語教育を中心にした復興運動がおこなわれている。書記化^{*}され、教育されるにふさわしいかたちに標準化・規格化され、だれにでもアクセス可能になった言語は、学校教育などをおしてあらためて話者を獲得することが可能である。「復活した (revitalized)」言語も、ユネスコの『世界の危機言語地図』に別枠として提示されている。

しかし、ここにも奇妙な矛盾が生じる。「言語(学)的多様性」を守るためにこそ、言語学的に一定のかたちで記述され、規格化されたはずの「言語それ自体」は、もはやかつての伝統的な生活や文化から切り離され、もはや守るべき「多様性」が失われた既製品のようになってしまう。書記化され、規格化された言語は、だれにとってもアクセス可能な、どこにでもあるような教科書のなかに収まった、つるりとしたかたちに変貌しており、もはや、ある地名、ある民族名に結びつけられる必要もない。話者集団名を使って名づけられた言語と、当の話者集団そのものはすでに断絶している。学校教育によってその言語をあらたに習得した話者は、言語学的に想定された「母語話者」ではなく、だれでも習得可能であるならば「かつての話者集団の子孫」であることがかならずしもその言語を習得しやすいわけではなくなり、それを選択する必要もなくなる。

世界中のさまざまなことばは、かつてはさまざまなかたちで使用され、さまざまな事情によって衰退していったのであろうが、一度「消滅の危機に瀕した言語」として記述されたのちの復権運動は、言語の書記化、教育への導入、民俗音楽や伝統の創造と再構築、教育現場だけでなく、新聞・雑誌・ラジオ・テレビなどのメディアでその言語を使用することによる（とくに若者の）雇用の模索など、世界中でおどろくほど似ている。そして、教材不足、教員養成の困難、個人的な努力によって支えられ、個人的な事情でつぶされることもありうる教育プログラム、教育で獲得した言語を使う場面の少なさ、といったさまざまな問題をかかえていること、とくに、まだ話しことばとして生活のなかで使われていた時代を記憶している話者たち自身が、このような「あ言語」

による復興にためらいを示していることなどもまた、世界各地で見られる現象である。どこにもある言語のうちのひとつにすぎなくなってしまった「言語それ自体」を学習するくらいなら、いつものこと、より有用な言語、たとえば英語などを学ぶべきなのではないか、——このような議論も各地でたびたび耳にする。

それでもなお、現地でこのような小さな言語を消滅から救おうと熱意をもって活動する人びとが見られるのは、世界の「言語的多様性」を守りたいからといった抽象的な理由によるものなのだろうか。先の「日本言語学会 危機言語のページ」の問い「Q5 言語の消滅を防ぐにはどうしたらよいですか？ 危機言語に対し、何かできることはありますか？」に対する答えをもう一度読みなおすと、もうひとつ、興味深いことに気がつく。言語学者はたしかに「活動家」として能動的にかかわることが期待されているが、そこではもはや、危機言語問題における「まなざす側」、主体ではない。⁴ 言語の記述場面においては、「記述される・まなざされる側」として、受動的な数名のインフォーマントであり、対象となる言語のリソースにすぎなかった話者の存在は、「文化遺産としての言語保護」にいたってはそこから切り離され、もはやその遺産の「保護」の主体と所属先は国家や政府にもなりえたはずだった。しかし、その「復興」がめざされたとき、そこには専門家に要請したりするような「現地コミュニティ」というよりも、「危機に瀕する言語」のまわりにあらたに形成された人びとのネットワーク——が（ふたたび）たちあらわれているのである。

「かつてあったはず」の文化や伝統、コミュニティを取り戻し、それをもとに生活を営んでいくことはむずかしい。そもそも「かつての話者集団」たちが、そのようなことを望んでいないことも多い。ただ、「危機に瀕する言語」は、だれにでもアクセス可能なモノに変貌し、歴史的な話者集団、固有の文化や文脈から切り離され、むきだしの「言語それ自体」として放り出されているがゆえに、その言語を保護したいという気持ちへと人びとをかきたてる。そしてそれらの人びとのなかで、その言語のまわりにあらたなネットワークをつくるのが可能になる。そこにいるメンバーはもはやその言語の「母語話者」ではないが、みずから選んでそのネットワークに参入し、きわめて自覚的にその言語を使用する話者となる。その復興活動は、言語の「危機度」を計る基準を逆行することがめざされる。それは、話者一人ひとりが「いつ、どこで、だれが、だれと、何について、この言語で話すのか」、X、当該言語の社会言語学的な状況を強く意識しつつ、さらには「自分は話者として、いつ、どこで、だれと、どんなことについて、その言語で話したいのか、話すべきか」を選択することで、その状況を意識的に変革させようとする活動である。話者は単に、多様なことばを場面ごとに使い分ける「社会言語学的」なモデルにそっているのではなく、その言語の使用状況をメタに記述する「社会言語学者」のまなざしをみずからもちつつ、しかも、その状況に介入する「言語政策」の主要なアクターになっている。

近代の「言語学」のモデルとして想定されていたのは、「自然に、無意識にことばを話す母語話

者」は、自分の話していることばに対して「専門的な知識」をもたず、一方で、外部からやってくる「専門家」としての研究者が、その言語を記述する能力と資格をもつ、という状態であった。それは、「母語話者インフォーマント」と研究者のあいだに、階層的、または「人種的」・植民地主義的な乖離^{かいり}がある場合にさらに顕著にあらわれた。研究者と、対象とされる人びととの搾取的関係の問題は、多くの研究分野で指摘されていることである。 Y、専門的知識による「言語学的」な言語の記述がひとたびおこなわれ、それにもとづいた「社会言語学的」な復興活動をはじめたとき、専門家としての研究者はそれらの話者＝活動家＝「社会言語学者」たちのネットワークに同等の立場で参加するメンバーとなるか、さらには利用される存在となる。そして、その利用価値や利用のされ方は、その研究者の立場や分野、「話者」ネットワークとの関係などによって、さまざまなものになるだろう。

(佐野直子「言語を「文化遺産」として保護するということ」)

* 書記化：文字や記号を用いて言語を書き記すこと

* インフォーマント：情報提供者

問一 空欄 X ・ Y に当てはまる最も適切なものを、次のア～エのうちからそれぞれ選びなさい。

- | | | | | | |
|---|---|---------|---|---|------|
| X | ア | よもや | Y | ア | さらに |
| | イ | むしろ | | イ | とりわけ |
| | ウ | すなわち | | ウ | しかし |
| | エ | にもかかわらず | | エ | だから |

問二 傍線部1「文化遺産としての言語を「保護」することは、その記録を「保存」することとは異なる」とあるが、「保護」が「保存」と異なる点について述べた次のア～オのうちから、最も適切なものを選びなさい。

ア 具体的な政策や活動、専門家の協力を求めるだけでなく、「国際的な基準」によって専門的に記述すること。

イ 人びとの日常的な言葉の使用をそのまま記述するだけでなく、専門家の言語学的手法にそって記述すること。

ウ コストをかけた事業を行うだけでなく、言語を記録するための博物館や情報センターを作っておくこと。

エ 社会言語学的な言語状況を記述するだけでなく、言語が話されてきた生活を含めて分析すること。

オ 言語の記録を残すだけでなく、言語を日常的に使う権利と次世代への継承を考慮すること。

問三 傍線部2「その言語の状況にコミットした態度」とあるが、言語学者がどのようなことを行うべきであると筆者は述べているか。本文中から二十字以内で抜き出しなさい。

問四 傍線部3「奇妙な矛盾」とはどのような矛盾か。本文中の語句を用いて四十五字以内で説明しなさい。

問五 空欄 あ に当てはまる最も適切な語句を、次のア～オのうちから選びなさい。

ア 規格化された

イ 消滅の危機に瀕した

ウ 話者集団名を使って名づけられた

エ 生きた

オ アイデンティティの源泉である

問六 傍線部4「言語の記述場面においては、「記述される・まなざされる側」として、受動的な数名のインフォーマントであり、対象となる言語のリソースにしかすぎなかった話者の存在」とあるが、こうした話者がどのような存在に変わっていくと筆者は述べているか。該当する箇所を含む一文を本文中から選び、初めの六文字を答えなさい。

問七 次のア～オについて、本文の内容に合致するものには a、合致しないものには b を、それぞれマークしなさい。

ア 近代の言語学においては、研究者と対象とされる人びとの間には不平等な権力関係があった。

イ 世界中のさまざまな地域に見られる「消滅の危機に瀕した言語」の復権運動のかたちは、国や地域によって大きく異なる。

ウ 消滅の危機に瀕した言語も、教育などの制度的な支援によって再び話者を獲得することがある。

エ 消滅する言語を保存するために日本言語学会内に設置された小委員会は、今日も活動を続けていている。

オ 消滅の危機に瀕した言語の復興活動に際して、言語学者には専門的知識が必要でなく、研究対象となる人びとと同等の立場で参加していく姿勢が求められている。